

都市の環境評価と都市政策



大城純男 著
大学教育出版
2007.10

「都市」というシステムは不思議な存在である。なぜ人や企業は都市に集まってくるのだろうか。遠距離で満員の通勤電車、混雑する道路、高い地価や住居費、多発する犯罪、崩壊したコミュニティ…。

それでも、依然として都市に住む人口の割合は増加し続けている。都市に住むことが強制されているわけではないのに。

たしかに、都市には他にない魅力がある。オペラハウスやミュージカル劇場は都市にしかない。高層ビルの連なった摩天楼、巨大なデパート、猥雑な飲食街、多様な職業を持った人たち、多種多様な事業所…。

こうした都市の魅力や短所などを構成する「社会

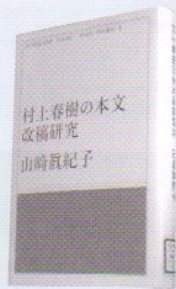
的環境」を、経済学的手法で分析・評価し、都市政策の意思決定に活かしていこうというのが、本書のねらいである。

すなわち、本書は計量経済学的手法による都市の社会的環境の評価方法を示し、これを日本の都市や都市圏に適用したものである。さらに、これらの分析を通して得られた都市環境に関する知見から、都市政策に関するインプリケーションを提示している。

都市や環境に関心のある方々から、忌憚のないご意見をたまわれば幸いである。[318.7 || O77]

(法学部教授 大城純男)

村上春樹の本文改稿研究 [Murakami Haruki study books:9]



山崎眞紀子 著
若草書房
2008.1

ピンク好きの私が、カバーには絶対ピンクを使ってくださいねと念を押した本書は、村上春樹の初期三部作である、『風の歌を聴け』、『1973年のピンボール』『羊をめぐる冒険』を対象とし、初発表誌から単行本、文庫本、『村上春樹全作品1979～1989』へと収録されるに当たってテキストの書き換えがどのように行われているか、その変遷を記し、コメントを付した実践的な著書である。文庫でも版が改まると書き換えが行われていたので、新旧2冊にあたった。どこがどのように書き換えられているか一語一句見ていく作業は気が遠くなる作業である。それでいて、その結果は「あ、そう」で済まされてしまうだろう。少しは読者が目を通したときに、興味を持ってもらえるように、なぜ変えたのか考察を施した。そんなの村上春樹自身に聞けばいいではないかと思われるだろうか？ 作品は作家がいちばんわかっているだろうか？

作家はよく書き換えをするということに気づいたのは、大学院生時代に熱心に読んでいたよしもとばななの作品を通してであった。彼女もよく書き換えている。そして、書き換えるたびに魅力が薄くなっていくのだ。

村上春樹の場合はどうか。実は村上もよく書き換えている。本書を上梓しようと決意した契機となったのは、担当編集者が「そのうち村上は書き換えている形跡を抹消しますよ、今のうちに残しておかなければ」と私にけしかけたからである。確かに村上春樹の作品の著作権は彼自身にある。彼が

出さないといえ出版されないのだ。

デビュー作の『風の歌を聴け』、そして次作の『1973年のピンボール』は英語翻訳版が以前には存在していたにもかかわらず、現在アメリカでは入手できないようになっているという都甲幸治の指摘もある。消される前に残しておくことは文学研究のひとつの使命であろう。また、編集者はこうも言った。「最近の研究者は評論家になってしまった。」と。実証的な手続きを踏んでこそ研究はなり立つのだが、調べれば誰でもできることは、近年軽く見られてきた。テキスト解釈に研究者みずからの能力を表明したいのだ。

作業を行っているときは、普段の論文を書くときとは異なる筋肉を使った。コメントは特に証拠がなくて苦労した。おそらく多くの誤りがある。これも冒険である。それでも村上春樹自身は『村上春樹全作品』に収録するに当たって『風の歌を聴け』と『1973年のピンボール』はあえて書き換えをしていないと声明しているが、実際は書き換えられていたことがわかった。作家は信じてはいけなかった。挿絵や記号も異なっていることも面白かった。

一見して無味乾燥に見える本書でも、たとえば数字もなぜ漢数字からアラビア数字に書き換えられているのか、本書を手にとって考えをめぐらせていただければ、村上春樹ワールドの迷宮に一歩足を踏み入れられるのではないかと思う。[910.268 || Mu43 || 9]

(法学部教授 山崎眞紀子)